ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

目　次

●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・1
戦後64年目に発見された「ひめゆりの校章」／平和講座「女子学徒と沖縄戦」に講師として参加／開館20周年記念特別企画展「ひめゆり学園(女師・一高女)の歩み」／「一人ひとりの戦跡めぐり」継続中／伊原第一外科壕の学術調査始まる
●開館20周年記念事業紹介・・・・・・・・・・・4
●「相思樹」(コラム)・・・・・・・・・・・・・・4
●写真でふりかえる20年・・・・・・・・・・・・5
●統計にみる2008年度・・・・・・・・・・・・・7
●ひめゆり学徒隊の戦跡／№3南風原壕群7･8･9号・・・・・9
●仲宗根政善日記抄（41）・・・・・・・・・・・11
●本棚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
●声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
●資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・15

第43号
2009.5.31

資料館トピックス

◆戦後 64 年目に発見された「ひめゆりの校章」

2008 年 12 月 31 日、糸満市の喜屋武海岸荒崎（荒崎海岸）で、沖縄県立第一高等女学校（一高女）の校章が発見されました。

校章が発見された荒崎海岸は、沖縄戦当時「ひめゆり学徒隊」として動員された一高女の生徒 7 名と引率教師 1 名を含む 10 名が亡くなった場所で、現在も戦跡めぐり等で訪れる修学旅行や平和学習の団体が後を絶ちません。

1945年の沖縄戦の際、彼女たちは、戦局の悪化にともない勤務していた第 32 軍司令部津嘉山壕群（津嘉山経理部）から糸満市伊原の伊原第一外科壕に撤退。6 月 18 日の解散命令で壕を出され、彷徨の末、沖縄本島最南端である荒崎にたどり着きます。そして 6 月 21 日、米兵による自動小銃の乱射を受け、パニック状態のうちに手りゅう弾の栓を抜いてしまったのです。

この校章は、そこで亡くなった一高女生 7 名のうちの誰かのものです。

一高女に在学していた証とも言える白百合の校章。母校に誇りを抱いていた彼女たちは、地上戦に巻き込まれ南へと追われながらもその校章を肌身離さず持ち続けていたのです。校章を発見し、当館にご寄贈下さった具志堅隆松さん（沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表）は、この校章が見つかったことで、沖縄戦を継承する際に事実を裏付ける重要な物証になる、と語っています。

戦後 64 年目に姿を現したこの校章は「戦争の悲劇を忘れないで」という彼女たちからの強いメッセージのように思われてなりません。

荒崎海岸で見つかった校章

女師・一高女の校章
1921(大正 10)年 10 月 30 日制定。デザインは女師・一高女共通だが、百合の花の向きが異なっている。菱型はダイヤモンドの結晶を表し、女子の貞操の堅固を象徴。中央に沖縄県の特産である白百合をあしらい、花の白は純潔、葉の緑は希望、地の赤は大和心、赤誠を示している。

◆平和講座「女子学徒と沖縄戦」に講師として参加

2009 年 2 月 14 日に沖縄平和ネットワーク主催の平和講座第 2 回「女子学徒と沖縄戦」で、当館学芸員の普天間朝佳が講演を行いました。参加者は 25 名ほどで、当館からは学芸課職員 3 名も参加しました。

講演では、ひめゆり学園時代の写真などをスライドショー形式で見せながら、女学生たちの学校生活や、沖縄にどのような女学校があり、ひめゆり以外にも女子学徒隊が結成されたこと、女学生らの戦場体験などを紹介しました。

参加者からは、「女子学徒たちは戦場にどのようなものを持っていったのか」といった質問や、現在医療に従事している方から「まだ精神的にも未成熟な学生たちが過酷な看護活動を行うというのは大変なことだと思う」などといった意見が聞かれました。

また、講演終了後に当館学芸員の古賀徳子がワークショップを行いました。参加者を小グループにわけ、「沖縄の女子学徒から何を伝えるか」というテーマのワークシートを配布し、参加者たちはそのワークシートをもとに様々な意見を出しあい、発表しあいました。参加者たちからは、「女子学徒一人ひとりに青春が

あったことを知らせたい」、「母親としてまず『平和であることの大切さ』を伝えたい」などの意見が発表されました。

意見交換を通して、「女子学徒と沖縄戦から何を伝えるか」という一つのテーマから、参加者の数だけ伝えたいことがあることがわかりました。資料館で日々「どのように女子学徒のことや沖縄戦を伝えるか」ということを模索している学芸課職員にとっても、有意義な講座となりました。

◆開館 20 周年記念特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」

2009 年 6 月 23 日、当館は開館 20 周年を迎えます。

その節目に、当館では、ひめゆり学徒の母校である沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の歴史をふりかえる 20 周年記念特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」を開催いたします。

女性教員の育成を目標とした沖縄師範学校女子部と、教養豊かな女子の教育を目指した沖縄県立第一高等女学校は、沖縄における女子教育のさきがけであり、併置校として同じ校舎で同じ先生方から学ぶという姉妹校のような関係にありました。今回の展示では、明治の開校から沖縄戦による閉校までの両校の歴史を「第 1 章　黎明期」、「第 2 章　成長・充実期」「第 3 章　戦時体制期」として区分し、草創期の苦労や新しい世界に足を踏み入れた女学生の驚き、大正デモクラシーのもとで勉学やスポーツに励む充実期の伸びやかな女学生像、戦争が近づき刻々と変わっていく学園生活の様子などを紹介します。

期間は 2009 年 6 月 1 日から 2010 年 3 月 31 日までの 10 ヶ月となっています。多くの皆さんのご来場をお待ちしております。

◆「一人ひとりの戦跡めぐり」継続中

当館では、「一人ひとりの戦跡めぐり」を昨年 11 月よりスタートしています。「証言員」（当館展示室内で証言を行っているひめゆり学徒生存者）の一人ひとりの戦争体験を現地で詳細に聞きとっていこうというものです。今年に入ってからは、1 月 16 日～ 5 月 26 日までに、昨年の 3 名と合わせて、12 名の戦跡めぐりが終了しました。

証言員と職員とは、日常の長い時間を共に過ごしていますが、普段は細切れの時間でしか体験を語り聞くことができていません。「一人ひとりの戦跡めぐり」では、一人の証言員と戦争体験のない職員とが一日かけてじっくり向き合って戦争体験を語り、聞いていきます。また、戦跡を一緒にまわることで、壕の位置や井戸の場所など、職員がはじめて確認した場所もあり、戦争体験をていねいに記録し記憶する機会になっています。

◆伊原第一外科壕の学術調査始まる

ひめゆり学徒隊の戦跡のひとつである伊原第一外科壕（糸満市字伊原在）の学術調査が昨年の 12 月より始まりました。この調査は、琉球大学法文学部の池田榮史教授に委託して行われるもので、戦跡考古学的手法を用い、学術的な視点から調査しようというものです。

同壕は、ひめゆり学徒隊が南部撤退後に入った 6 つの壕の一つで、沖縄戦末期の 6 月 17 日に壕入口近くに砲弾が落ち、多くの学徒が死傷した場所です。また多くの学徒が解散命令を受けた場所でもあります。

12 月に行われた調査は「測量調査」で、本調査は本年の 5 月と 8 月に行われる予定です。

調査結果は、将来の壕の保存・平和学習への活用に生かすことになっています。

20周年記念事業紹介

当館は、2009年6月23日に開館20周年を迎えます。節目の年を迎えるにあたり、さまざまな記念事業を行う予定です。記念事業を通じて、これまで当館を支えてくださったみなさまに、あらためて感謝の意を表するとともに、20年のあゆみをふりかえり、平和への思いを新たにする一年としたいと考えています。

■記念イベント

○特別企画展「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」2009年6月1日～2010年3月31日（当館第6展示室）

○レクイエムコンサート　2009年6月23日13時～（ひめゆりの塔前）

○平和講話会（証言員による講話）2009年　夏休み期間中（当館多目的ホール）

○20周年記念平和講演会（立命館国際平和ミュージアム安斎育郎名誉館長）　2009年8月22日（那覇市内）

■記念事業

○ひめゆりの塔改修・敷地内整備

○平和学習教材・パネル「ひめゆり学徒と沖縄戦」県内中学校・高校へ寄贈

○20周年記念誌発行　2009年9月発行予定

○一人ひとりの戦跡めぐり

○伊原第一外科壕学術調査

相思樹

アレン・ネルソンさんが教えてくれた「戦争の真実」

学芸員　古賀徳子

二〇〇九年三月二五日、元米海兵隊員のアレン・ネルソンさんが六一歳で亡くなった。米軍がベトナムで使用した枯葉剤の影響が疑われる「多発性骨髄腫」という癌（がん）だった。

ネルソンさんはいつも「戦争をするとき、国家は、相手の人たちのことを『人間ではない』と思い込ませる」と言っていた。相手が怪物や動物や虫のような人間以下の存在であり、話し合いなど不可能だと信じさせるのである。さらに、「ベトナムの村を襲撃した後、私たち（米軍）は生き残った人間に水や食料を与えるよう命じられた。しかし、その前に大勢殺している。私たちは殺した後、残った人間を『助ける』というわけだ。」と話してくれた。

それを聞いて、私は沖縄戦体験者の証言を思い浮かべた。沖縄戦で生き残った人々は、野獣のように残虐なはずの米軍が水や食糧を与え、けがの手当までしてくれるのを見て衝撃を受けたという。ひめゆり学徒も同様に、米軍に捕まれば恐ろしい目にあうと聞かされ、戦場を逃げまどった。もっと早く投降していれば、家族や友だちが助かったかもしれない。これが生き残った人たちに共通する思いではないだろうか。

米軍は戦時国際法に従って非戦闘員を保護しなければならなかったし、「日本人ではない」沖縄人は戦争の被害者であり、救助すべき対象であると認識していた。そこで米軍は住民向けの投降勧告ビラで、戦闘地域からの立ち退きや日本兵と間違われないような行動を呼びかけている。

しかし、ネルソンさんの言う通り、米軍の最優先任務は敵を殺害することであった。日本兵がいる可能性があれば容赦なく攻撃した。そもそも空襲や艦砲射撃は戦闘員と非戦闘員を区別しない無差別攻撃である。

現在も同じことがイラクやアフガニスタンで行われている。イラク帰還兵は「ある日、私たちは市内に入り込み、民間人死傷者が発生するにちがいないような箇所で道路封鎖を行います。そして次の日の朝、私たちは人道的な任務を行うというわけです。」と語った。

ネルソンさんは、「私が体験したベトナム戦争と同じことが、全ての戦争で起こっている」という。悪者をやっつけてヒーローになれる、圧政に苦しむ人々を解放すると思っていたアメリカの若者たちは、戦場で人間、特に子どもや女性を殺したことによって心身を病み、通常の社会生活を送れなくなってしまう。アメリカのホームレス男性の三人に一人が元兵士とも言われている。ネルソンさんも長年ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）に苦しみ、ホームレス生活を経験した。

「もし誰かが、戦争の真実を教えてくれていたら、私は決して戦争に行かなかった。」という思いから、ネルソンさんは、子どもたちや若い人たちに「戦争の真実」を語り続けた。それは私にとって、ひめゆり平和祈念資料館が伝える「戦争の真実」とつながっているのである。

写真でふりかえる 20 年
～ひめゆり平和祈念資料館のあゆみ～

当館は、今年の 6 月 23 日で開館 20 周年を迎えます。開館以来、多くの方々がご入館下さり、2008 年度で 16,340,353 名の入館者を数えました。入館者の多くが当館の展示をきっかけに、平和への思いを深めて下さっていることに感謝致します。

これまで、イベントや企画展を通して、戦争の実相や平和の尊さを訴え続けてきました。また、次世代への継承のため、ひめゆり学徒生存者の証言映像制作、展示のリニューアルなどさまざまな活動にも取り組んでいます。今後も、この節目を次の 20 年への新たなスタートととらえ、より充実した活動を目指して参ります。

ひめゆり平和祈念資料館開館（1989 年 6 月23 日）

資料館建設が決定してから約7年の歳月をかけ、悲願の資料館が開館。当日はあいにく大雨だったが、同窓生やご遺族をはじめ、多くの方々がご来館下さった。

湾岸戦争即時中止を求める抗議活動(1991年2 月10日）

湾岸戦争勃発に際し、ひめゆり同窓会は湾岸戦争の即時中止を求める要請文を出し、デモ行進に参加。

「戦跡めぐり―ひめゆり学徒隊の足あと―」実施
（1991 年3 月31 日　第 1 回）

開館 2 周年記念イベントとして開催。全国各地から応募があった。那覇市安里の学校跡からひめゆり学徒隊が辿った道のりを、生存者らの証言を聞きながら追体験することができる貴重な機会となった。1996年の第 6 回まで開催したが、生存者の高齢化に伴い、終了。

戦後 50 年目の仏前供養（1995 年5 月下旬～ 8 月上旬）

戦後 50 年を機に、生存者らが、沖縄戦で亡くなった恩師・学友のご遺族を訪ねた。亡くなった学友らの生前の学校での様子などを聞き涙ぐむご遺族も多くいらした。自責の念に駆られ、長い間ご遺族に会うこともできなかった生存者もいたが、この仏前供養をきっかけとし、生存者と遺族の新たな心の交流が生まれた。

企画展

2008 年までに、5 回の企画展を開催しました。いずれの企画展も、生存者が企画立案から携わっています。特に 10 周年記念特別展「沖縄戦の全学徒たち」は、ひめゆり学徒隊だけではなく他の男女学徒隊の全容を初めて紹介したことが高く評価されました。

開館 1 周年記念特別展「ひめゆりの青春」開催
（1990 年6 月23 日～ 12 月 23 日）

開館 10 周年記念特別展「沖縄戦の全学徒たち」開催
（1999 年 6 月 23 日～ 7 月 4 日）

2001 年度企画展「仲宗根政善～浄魂を抱いた生涯」
（2001 年 8 月 1 日～ 8 月 15 日）

2003 年度企画展「ひめゆり学徒の戦後」
（2003 年 8 月 15 日～ 8 月 30 日）

2005 年度企画展「沖縄陸軍病院看護婦たちの沖縄戦」
（2005 年 8 月 1 日～ 9 月 30 日）

次世代プロジェクト

ひめゆり平和祈念資料館の設立・運営に携わり、開館以来館内で証言している生存者の高齢化に伴い、2001 年、次世代への継承を念頭におき、展示リニューアル、証言映像の撮影、後継者の育成などを柱とした「次世代プロジェクト」を発足。2005 年には非体験者である「説明員」を採用しました。

「ひめゆり・ヨーロッパ平和交流の旅」実施
（2003年9月1日～9月10日）

展示のリニューアルと次世代への継承をテーマとし、ヨーロッパの類似施設をめぐる「平和交流の旅」を実施。この視察は、展示リニューアル及び現在進行中である「次世代プロジェクト」の方向性に大きな影響を与えた。

リニューアルオープン
（2004 年 4 月 13 日）

説明文を増やし、生存者の証言映像を上映するなど、若い世代によりわかりやすく伝わるような展示を目指した。展示の文章は、生存者の原稿に推敲を重ねて完成させた。

県内類似施設視察

次世代への継承や語り継ぎの手法の模索の一環として、沖縄県平和祈念資料館、南風原文化センター、佐喜眞美術館の視察・交流会を行った。

「ひめゆりガイド講習会」開催（2008 年9月26日）

ひめゆり学徒隊の体験を正確に伝えようと、平和ガイド、バスガイド、タクシー運転手など、沖縄戦を伝える活動をしている方たちを対象に「ひめゆりガイド講習会」を開催。生存者と資料館職員が共同で企画・実施した。

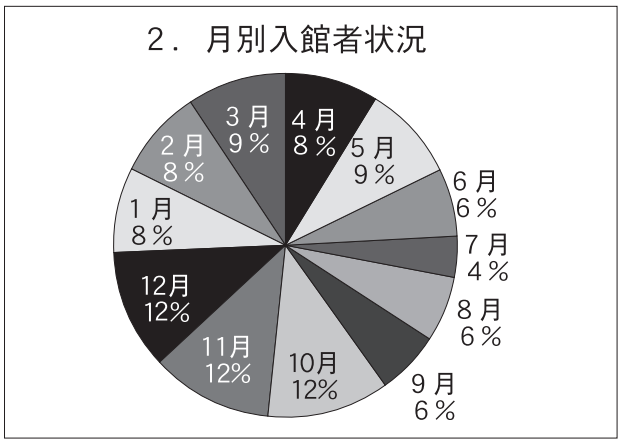
統計に見る2008年度

1.　総入館者

・昨年の入館者は816,745人（前年の869,976人より－53,231人）。1ヶ月の平均入館者は68,062人、1日平均は2,243.8人。
⇒開館後11番目に多い入館者数。
・開館以来20年間の1か年の平均入館者数は817,018人、1日平均は2,275人
・昨年11月で開館以来の入館者が1600万人を超えた。

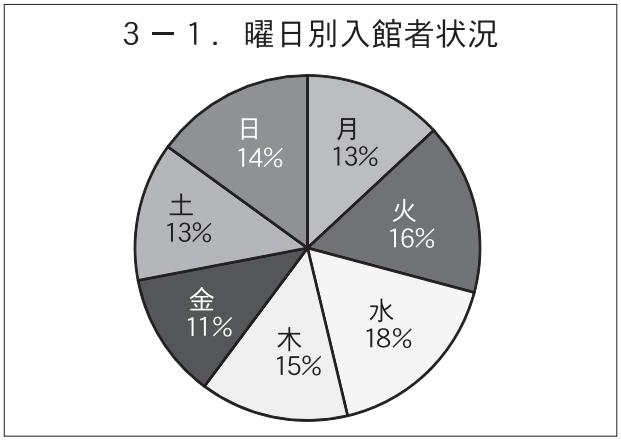
2.　月別入館者

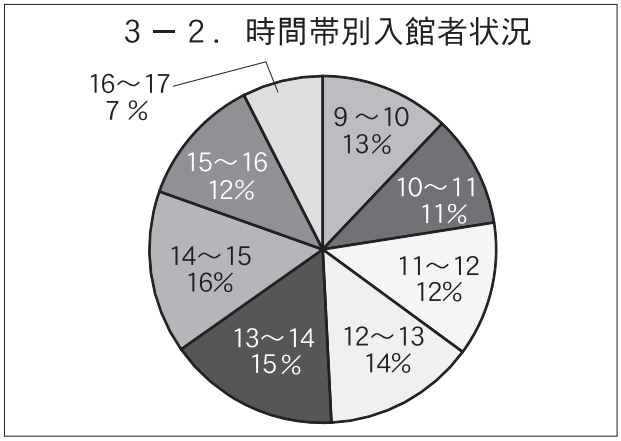
・昨年1年間で入館者の多かった時期は修学旅行の入館の多い10～12月の3ヶ月間。3ヶ月間の合計は294,445人で、総入館者数の約36%・逆に少ない時期は7～9月。この時期は夏休みで家族づれの姿が目立ち、団体入館が少ない。
　3ヶ月間の合計は130,279人で、総入館者数の約16%



3－1.　曜日別入館者数／3－2.　時間帯別入館者数

・曜日別入館者数は週半ばの火～木に集中している。
曜日別：月13%、火16%、水18%、木15%、金11%、土13%、日14%
・時間帯別入館者数：12時から15時までの午後早い時間の入館が多少多い。

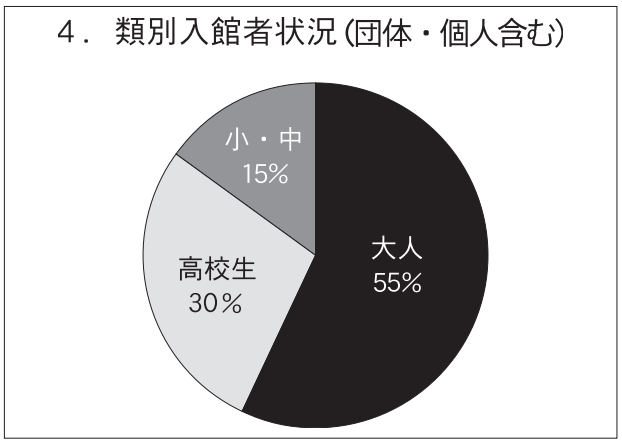




4. 類別入館者数

【総数】昨年度の割合は大人が 55%、高校生 30%（そのうち約 96%が団体で来館）、小・中 15%（そのうち約 73%が団体で来館）。20 年間の平均では大人が 69%、高校生 21%（そのうち約 94%が団体で来館）、小・中 10%（そのうち約 61%が団体で来館）

【団体】昨年度の団体の割合では、特に高校生の割合が高く 62%、次いで中学生 21%、大人 16%、小学生 1%となっている。20 年間の平均では高校生が 55%、大人が 27%



5. 学校団体の入館状況

・昨年、来館した学校団体は 2,345 校、322,543 人（前年の 2,306 校、315,369 人に比べ＋ 39 校、＋ 7,174 人）。内訳は、小学校が 100 校の 4%、中学校が 827 校の 35%、高校が 1,418 校の 61%

・学校団体地域別

＊全体では、関東 30%、近畿 15%が多い。

＊小学校は、沖縄 63%、九州 15%、関東 11%がベスト 3（前年は沖縄 60%、九州 19%、関東 13%）

＊中学校は近畿 32%、中国 18%、九州 17%がベスト 3（前年は近畿 34%、中国 18%、九州 17%）

＊高校は関東 47%、東海 16%、東北 10%がベスト 3（前年は関東 45%、東海 15%、信越 10%）

・学校団体都道府県別

＊小学校　100 校のうち沖縄が 63 校とダントツ。

＊中学校は大阪 118 校、岡山 75 校、兵庫 73 校、熊本 63 校がベスト 4

＊高校は東京 204 校、神奈川 112 校、千葉 81 校、埼玉 74 校がベスト 4

⇒沖縄の中学・高校の入館の割合は中学 2%、高校 0.6%。

・月別では　10 月 21%、11 月 17%、12 月 16%、5 月 13%が多く、その 4 ヶ月間で全体の 67%が入館している。沖縄の学校の割合が多い小学校は、5 月 19%、11 月 19%、6 月 14%が多く、近畿や中国、九州の学校の割合が多い中学校は 5 月 43%、4 月 20%に集中、高校は 10 月 26%、11 月 22%、12 月 20%の 3 ヶ月間に集中している。

6. 入館料免除

団体（特別支援学校・一般団体含む）	86 団体／ 1,760 人
	介助・引率者　731 人
修学旅行下見	808 校／ 2,232 人

7. 外国人　4,421 人

ひめゆり学徒隊の戦跡

No.3　南風原壕群７・８・９号

所在地：南風原町
規　模：７号壕は長さが23m、８号壕は長さ29m、９号壕は長さ29mで、これら３基の壕は奥で連結していたといわれる。
部　隊：沖縄陸軍病院(球18803部隊)

⑴　概　要

７・８・９号は喜屋武シジから東側へ伸びる尾根に位置していた。この３基は奥で連結しており、第１外科の中心的な壕群であった。

７号壕は病棟で、通路の片側の二段ベッドに約70人の患者が収容された。勤務中に負傷した渡嘉敷良子（師範本科２年）や狩俣キヨ（師範本科２年）も７号に入院した。７・８・９号をつなぐ奥の通路は勤務者の控室となっていた。

８号壕は第１外科の治療本部であり、入口に衛生兵、奥に軍医と看護婦が詰めていた。

９号壕の奥は医局（事務室）になっており、第１外科の軍医が２～３人ずつ交替で待機していた。５月中旬、壕の真上に直撃弾を受けて入口が落盤した後は、奥の方に数名の患者を収容するだけとなった。

1982年に行われた厚生省による遺骨収集の際に、重機による確認が行われたものの、遺骨収集後埋め戻された。2001年２月24日～３月30日に行われた琉球大学考古学研究室の試掘調査によって、８号、９号と考えられる壕の入口付近と、壕番号が不明の新たな壕の入口が１ヵ所確認されている。

８号壕調査現地説明会(2001年４月８日)
南風原町提供

⑵　壕の特徴

＜７号壕＞厚生省による遺骨収集の際に確認されており、８号壕の北側約15ｍ辺りに位置する。その際、重機による掘削によって地表から数ｍ下にあることが確認された。床面の位置が深いことから人力による掘り下げでは調査が困難である。

＜８号壕＞厚生省による遺骨収集の際に、幅約1.2ｍほどの狭く細長い壕であることが確認された。琉球大学の調査でも、幅の狭い壕の床面の一部が確認されたが、壁面は厚生省の遺骨収集によって粗く削り取られ、確認できなかった。

＜９号壕＞琉球大学の調査で、壕内から運び出された土砂を通路の両側と前方に盛り上げて、爆風避けのための土手を作った様子が確認された。通路の床幅は約1.6ｍで、内側に隣の８号壕への通路（幅約80㎝）が造られていた。

⑶　７・８・９号壕に関する証言

①　７号壕

・第一外科の七号壕に一週間位配置になりました。七号壕は余り広くなく、奥の方には重症患者が居て、薄暗く、ランプの火が消えるほど炭酸ガスは充満し、膿の臭いが鼻をついていたことを覚えています。そこでは、患者に食事や水をあげたり、排尿の世話とか看護婦さんのお手伝いをしていました。

（仲里正子　師範本科１年）

・七号壕は、天井は木の枠、床は板を張っていて、片側二段ベッドでした。ベッドは二人寝ることができ、私の隣は仲本さんでした。私達は下の方でしたので、上から小便や血がたれ閉口した。頬が貫通した防衛隊の人が、口に溜まったウジを吐き捨てるようにして取っていたが、やがて「アンマーよー！」と叫んで死んだ。また、通路に寝かされていた新垣ヨシオさんはお腹をやられていて、軍医がハ

リガネに脱脂綿を巻いてお腹の傷口に差し込み、何やら検査をしていた。しばらくして「水を飲ませなさい」と言い残して出て行った。翌日新垣さんは死んだ。専属の看護婦さんはいたが、包帯交換はたまにしかしなかった。交換の時、包帯の下はウジでいっぱいだった。壕の中には、すでに完治した兵隊が五、六人いて（所属部隊と連絡のつかない）、飯あげや死体捨てなどをしていた。飯は、オニギリが一日三回、たまにオカズがあった。

（玉城伝造　入院患者）

・治療本部の八号と私達の七号とは貫通していて、七号にも七十人位、Ｌ字型の横の部分まで患者が入っていました。七号に勤務した生徒は新垣さん本科１年の嘉手刈峯子さんと私、それに正規の看護婦さん一人で、七〇人を看ていました。（略）七、八、九号の壕の間に橋渡しになった所が、私達と軍医の控室になっていたのです。

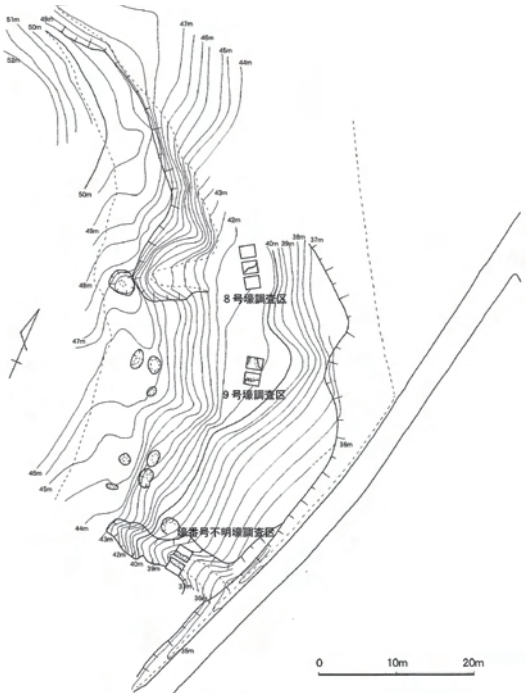
（仲里マサエ　師範本科１年）

②　８号壕

・三月末、学校が焼けたので、壕に移った。第一外科の八号壕でした。この壕は、勤務者の壕といって、軍医・看護婦の詰所で、患者はいなかった。軍医と看護婦は奥の方に、衛生兵は入口近くにいた。患者の治療はしなかったが、飯あげと治療済みの患者を壕に案内する日々でした。水汲みは壕にいた三名の雑仕婦がしていた。　（仲村喜英　衛生兵）

・軍医室は八号壕と九号壕の通路にあった。付近の民家の床板や雨戸をとりはずして持ちこみ、じめじめした土の上に渡し、その上にゴザを敷いてあった。比嘉診療主任以下第一外科の軍医が全員ここに詰めていた。（略）八号壕は五月中旬、壕真上に直撃弾を受け、入口はふさがり支柱も落ち、危険にひんしたので、奥の方にわずかに数名の患者を収容しているだけだった。通路は八号壕からさらに七号壕に連結する計画だったらしく、軍医室から七号壕へおよそ七、八メートル掘りかけていた。

（仲宗根政善　引率教師）



８号壕・９号壕・番号不明壕調査区設定状況図
南風原町提供

③　９号壕

照屋は九号壕の受持ちに割り当てられました。学生さんが四、五名配置されていたと記憶しています。その壕はコの字型になっていて、奥には医局がありました。診療主任（比嘉軍医）、福島軍医、山崎軍医、大隅軍医、児玉軍医、平良進先生（歯科医軍属）方が、二、三名ずつ、交代で待機しておられたようでした。（略）ある日のことでした。患者の治療中（ガーゼ交換）に、大きな爆発音と爆風がして入口が埋もれ、その後のことは覚えていません。

（照屋とみ　看護婦）

参考・引用文献

『南風原町文化財調査報告書　第６集　南風原陸軍病院壕群Ⅱ―沖縄県南風原町所在南風原陸軍病院壕群の考古学的調査報告書Ⅱ―』南風原町教育委員会、2008 年

吉浜忍『南風原陸軍病院』南風原町教育委員会、1987 年

長田紀春・具志八重編『閃光の中で―沖縄陸軍病院の証言』ニライ社、1992 年

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川文庫、1995 年

（学芸員　古賀徳子）

仲宗根政善日記抄 (41)

［1979 年 11 月 10 日］（前回より続き）

六月十九日解散して、生徒たちは、三三五五つれだって砲弾の雨の中へと彷徨をつづけた。私も負傷をして、生徒のあとを追うて、どこででも死のうと、山城の丘を越えて、沖縄最南端の海岸に達した。阿旦（あだん）のジャングルであった。三三五五つれだって壕を脱出した生徒たちは、また一団一団と集団をなした。本能なのであろうか。死なばもろともと思うためなのだろうか。平良松四郎教諭の引率する一隊。平敷善徳訓導の引率する一隊と私のもとに集まった一隊が現在散華の塔のある後ろの木麻黄の下でいっしょになった。日はくれかかり、餓渇に苦しんだ。水をさがしにと平良、平敷三名が出ようとするとき、山里は私もいっしょにつれて行って下さいとついて来た。その夜は、喜屋武断崖の岩かげで三隊はいっしょにいた。翌日、敵船艇が近づき、三隊は再びわかれわかれになった。平良松四郎引率の隊は二十一日に自決した。私の隊十三名は、二十三日に投降した。山里はその十三名の中にいて、元気だったが、後石川病院に収容されて、戦病死した。田場園枝も同病院に勤務していたが、山里の臨終にはい合さなかった。石川病院でなくなった者は、石川の部落をはずれた田圃の中の墓地に葬られた。私は並び立つ墓標の一つ一つをあらためたが、とうとう山里美代子の墓標をさがし出すことは出来なかった。

小さい橋を渡ると、松や木麻黄におおわれた丘があった。今では削りとられて、大きな建物もたっていて当時のおもかげは全くない。この丘の岩かげに、南風原陸軍病院から歩いて来た患者たちが、疲弊困憊の極に達しぬれた草の上に付していた。鳥取曹長もその中によこたわり、口もきけなかった。慰めてあげることばもなく、これが最後の別れのような氣がしたが、彼は奇跡的に生きのびた。戦後、東京銀座の小さな店の二階で彼にあい、お互いに生きのびたことを喜びあった。彼は気骨ある一風かわった性格をもっていた。どろんこの中を三つばいになってはいながら、そばを過ぎて行く人々に、声をはりあげて軍をなじり、陸軍病院をのろっていたという。壕内では、あるいはもてあましていたのかもしれなかった。わざわざ軍医室の近くに連れて来ていた。ひそかに彼は、看護婦のだらしなさをもらしていた。陸上競技の選手だったらしく、強靭な体をしていたから、あの困苦にもたえることが出来たのであろう。足を切断され傷痍軍人になっているのだ、国家の保障はいっさい受けないといっていた。あれからお互いに文通もないままに過ぎてしまった。「沖縄の悲劇」を上げたが、ろくなことはやっていないから、いいことは書かれてなかろうと、何か不安そうに受けとったが、彼の悪口などはいっさい書いてなく、助けて上げるべき彼にかえって助けられたことを書いてある。「沖縄の悲劇」を彼は、どのように読んだのだろうか。

戦後いくたびかこの丘のそばを通ったが、その度に、鳥取曹長のことが浮ぶ。彼こそ、生涯軍をのろいつづけているにちがいない。今頃沖縄戦で生きるも死ぬもすべて運命によってさばかれたと、思ったりするのだが、鳥取曹長の如きは全く別で、彼は人間のあるだけの力を盡して生きのびたので、運命を自らの力できりひらいたのである。死に対してもっとも力強く頑強に、抵抗して生き残った者である。凡人ではとても及ばない心身の強靭な力で生きのびたのである。

真壁部落入口の掘割りを過ぎると、今は、坦々たる道路が、米須へとつづく。

戦争中、夕方時、一時砲弾の音がすっかりやんで、何の物音もない静寂な状態にかえる一時があった。空にただトンボ機だけが、まるで秋空を飛ぶ赤トンボのようにかろやかにスイスイ飛んだ。偵察機であり、裸になって乗っている飛行士までが見えた。とても戦争中のこととは思えなかった。この静寂は時間が来ると、死に直面してふるえながら壕にかがまり、岩かげに臥し、からっぽの豚小屋にひそんでいた兵士、民間人の一切が、野原へとまる

で蟻のように食糧さがしに出たのである。私はその様子を、波平の壕の入口に立って見た。

真壁から米須への道路上に、よれよれの服をまとい、兵も民も、あるいは杖つき、肩をかし、手をとり合い、まるで葬列のように進んで行ったのである。

今は、その亡霊のような葬列の幻影も坦々たるアスファルトの道路の下にすっかり消えて行ってしまった。わずかに残る昔ながらの石垣がそのおもかげをとどめているにすぎない。新しく建てられたコンクリートの塀、ブロック建ての建物を指しながら、いくら、戦争中はこうだと説明してやったところで、戦争当時の状況など想像の及ぶところではないであろう。戦争の悲惨は秋日のあかるい中に次第に風化されて、何も残らない。

やがて米須部落に車がはいった。この部落は人口千五六百もあった。戦後字名城部落に全員が集まった時は百十名であったという。金城和信氏が真和志村長になり、野に鍬をいれる前に先ず、遺骨を収拾して野を清めることから始めようと先頭に立って、散乱する遺骨の拾集にかかった。その時、米須の部落の一軒々々をまわったのだが、その惨状は目もあてられなかったという。水タンクの中に三四名の遺骨がおりかさなっていたとも語っていた。終戦直後は、あき屋敷が多く、かや葺きの小屋がまばらに建った。この地方は石を積んでその上に屋根をのっけるという簡素な造り方であった。今はどの家もブロック塀にコンクリート建物にかわっている。赤瓦の家さえほとんど見受けられなくなった。おそらく、沖縄戦でもっとも犠牲の多かった部落であろう。

車は右折してひめゆりの塔に向った。米須とひめゆりの塔の中間右手に、龕屋があったが、戦争中に破壊されて、その無惨残骸が残っていたが、今はその後跡形もない。立派建物が両側に建ち並んでいる。

塔につくと、相も変らず参拝人で混雑している。参拝人というよりは観光客であり、ただ物めずらしそうに壕をのぞいて帰る人々である。

塔の右側塀のわきに高く伸びていた木麻黄を先日奉讃会の方で切り倒してまばらになっていた。その空間に想思樹四本を植えることにした。家から鳳凰木の苗木を八本ほど持って来たので、集まった昭和十六年の卒業生十名ほどといっしょになって植えた。

想思樹は、戦前、女師一高女の門前に大木の並木になって茂っていた。そのかげを朝夕に通い乙女らのめでた木である。枝ぶりもよく葉の緑も美しい。塔の前にも数本伸びているが、夕影にかがやく色つやはとくに美しい。

卒業生たちは、植えながら、やがて大木になって葉の茂るのを思い浮べていた。

作業がすんだ頃には、参拝客もまばらになった。持って来た花束を「いはまくら」の歌碑に、たてかけてくれた。

慰霊祭の行われる時に、必ずほととぎすが啼くというと皆は、耳をかたむけていた。香の匂いをしとうてくるのであろうか。昨年も今年も追悼をさゝげる時に啼いている。福地氏は、その翌日、聞きに行ったが、影も形も見えなかったという。

静寂にかえって来ると、乙女らの姿が浮び声も聞えて来るような気がする。観光客のそうぞうしさもなく、乙女らを静かにやすらかにねむらせたいと思う。

たそがれた頃に、皆とひきあげた。先刻の来た道を帰った。夕雲が燃え、真壁一帯の野のすすきに照りはえている。何という美しい色なのだろうか。このすすきの野に幾万の骨がうずもれているとは思えない。空はいっさいのものをおういつくして、過去へとおいやってしまうのであろうか。よれよれの服をまとい葬列のように歩んでいた道もなく、たんたる道路の上を夕雲に照らされながら車は疾走をつづけていた。

※読みやすさに考慮して、仮名遣い、旧漢字、句読点、改行などを改めた箇所がある。また、明らかな誤字は改めた。

本　棚

（仲程昌徳）

国森康弘著『証言　沖縄戦の日本兵　六〇年の沈黙を超えて』

沖縄戦記の刊行が相次いで見られる時期というのは、多分ある。そして、戦記の刊行を促したそれぞれの時期にはそれぞれの背景、理由というのもあるわけだが、近年のそれが何によっているかは、明らかである。

近年のそれは「部隊の指揮官が『集団自決』を命じたとする著書の記述をめぐって、梅澤元部隊長らが二〇〇五年八月五日、出版元の岩波書店と作家大江健三郎氏に対し、出版差し止めや損害賠償を求めて提訴した」（国森康弘『証言　沖縄戦の日本兵』）いわゆる沖縄「集団自決」訴訟、そして二〇〇七年三月明るみになった「高校歴史教科書の『集団自決』記述から日本軍の強制を削除させ、住民があたかも自発的に死んだととれる表現に書き換えさせた」（謝花直美『証言者が語る「集団自決」』）いわゆる文部科学省による教科書検定問題の再燃といった事態と関っている。

二つの問題が、間違いなく沖縄戦と関る著書の相次ぐ刊行を促す元になったわけだが、本書はその一冊で、「元兵士二一人」に「『集団自決』から奇跡的に命を取り留めた沖縄各地の住民一四人」と「義勇隊や防衛隊員、伝令兵として日本軍に協力し、駐屯部隊の内情と住民の境遇、双方を知る沖縄出身の三人」からの聞き書きを、「沖縄戦の概要」「戦場の日本兵たち」「『集団自決』の光景」「加害の諸相」「中国戦線からやってきた日本兵」「元兵士たちの今」といった六章にまとめている。

本書は「はじめに」に記されているように、「これまでの沖縄戦に対する歴史認識は部分的なものであり、空白があると言えるかもしれない」ということから「その空白部分を埋めるために書き進めていった」とされるものである。「空白部分」というのは、「日本軍将兵の口から当時の様子を聞くことはほとんどなかった」ということであり、そこで「元日本兵」の証言が集められていたが、そのなかの渡辺憲央や儀同保にはすでに沖縄戦に関する著書があって、そこで書かれていた以上のものが語られているわけではない。また、他の兵士の証言にしても、沖縄戦記に新たな事実を書き加えるほどのものがあるとは言えない。

しかし、そこで「元兵士」によって語られたことが、すでに知られていることだとして一蹴されていいはずはない。「元兵士」たちが語った「沖縄の人は私ら兵隊以上、日本人以上に一所懸命やって、日本人だということを認めてもらおうとしているのが痛いほど分かった」（渡辺憲央）といったことや「日本帝国のために、大君のために、死ぬのは名誉と叩き込まれていたからね。我々兵隊よりも徹底していた」（高島大八）といったことは、沖縄県民の無数の死を考えていく際、肝に銘じておかなければならないことであろう。

本書は、「沖縄戦と『集団自決』　何が起きたか、何を伝えるか」（臨時増刊『世界』二〇〇八年一月）に掲載された「元日本兵は何を語ったか」に「沖縄戦の概要」「中国戦線からやってきた日本兵」「元兵士たちの今」を書き加えて刊行されたものであった。『世界』臨時増刊号によって新たに取上げられた「集団自決」は、そのあと森住卓写真・文『沖縄戦「集団自決」を生きる　渡嘉敷島、座間味島の証言』（二〇〇九年一月）の刊行へと続いていく。そのなかで、宮村トキ子が「教科書問題がなかったら、私は誰にも話をしなかったかもしれません」と言っているように、これまで語ることのなかった人々が「教科書検定問題が噴出した〇七年の三月以降」相次いで口を開いていくようになる。

生き残った人々が何を伝えようとしたか、何を伝えたいためにあえて口を開いたのか明らかであるにも関らず、そのような言葉を「被害者意識に走り過ぎて正しく事実をつたえていない」として、否定し去ろうとする動きも強い。秦郁彦編『沖縄戦『集団自決』の謎と真実』（二〇〇九年三月）に収録された論述などがそうだ。戦争を生き残ったものたちには到底受け入れ難いが、同調者が見られるようになってきたことからすると、既に知られていることであれ、何度でも繰り返し取上げ、語り続けていく必要があるといえる。

声

亡くなられた方の思いを末長く伝えて…

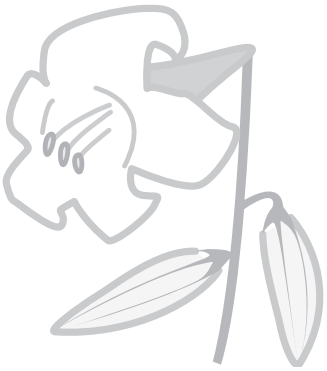
秋田県　女性

雪国秋田にも雪が少しずつ溶けて春の足音が聞こえる様な季節になりました。

私事、旅行を終えてやっと沖縄より帰ってまいりました。この旅行の話が出ました時、一番先に私は「ひめゆりの塔」に行ってみたいと思いましたが、一緒の方々の意見も聞かないとと思い少し控えました。が最後になりましたが待ちに待った「ひめゆりの塔」にお参りする事が出来ました。手を合せ、名前がきざまれた碑を見た時は、胸が一杯になり何も見えなくなりました。私も昭和二十年三月九日の東京大空襲に合い、火の手上った中明治神宮まで逃げまどいました。がお蔭様で今こうしてひめゆり学徒隊の方々の御めい福をお祈りする事が出来ました事を本当に幸せに思っております。

いろいろの展示品を見せていただき、壕の前で女性の方の説明を聞きました時は本当に涙が止まらなくなり、亡くなられた方々が私の姉と同年位じゃないかと思い、なおさら思いを深くいたしました。

その時主人が説明される方に「此の亡くなられた方とどの様な関係ですか」とたずねたところ「同窓生」という事でした。どうか亡くなられた方々の想い、又体験されました事を末長く伝えて下さいます様、お願い申し上げます。



資料館ガイド

◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前９時～午後５時　閉館　午後５時 25 分
②休 館 日　年中無休
③入 館 料　大人￥300　高校生￥200　小・中学生￥100
　　団体 20 名以上、10% 割引
④交　　通　那覇から糸満市行きのバス㊾で約 30 分、さらに糸満バスターミナルから㊷㊼㊽のバスで約 15 分、「ひめゆりの塔前」バス停下車。

◆多目的ホール利用の手引き

1．多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話や証言ビデオ（各 25 分）を視聴することができます。
2．ホールの予約は、１年前（その月の１日）から受付します。
　→例：来年 10 月 31 日までの受付は、今年 10 月 1 日より受付開始。
　※予約の締切日は、１週間前とさせていただきます。（電話申込時間　9：00 ～ 17：00）
3．講話については **1 日の回数が 2 回（1 団体 40 名以上）**と制限されています。
　また、**月曜日は講話なしでビデオのみの受付となっておりますのでご了承下さい。**
4．講話の受付時間　　9：30 ～ 15：00
　ビデオの受付時間　　9：00 ～ 16：00
5．**ご予約は空き状況をご確認後お申し込み下さい。受付は先着順で、資料館窓口、電話でお願いします。いずれの場合も後日確認の為、文書をお送り下さい（ＦＡＸ可）。**
6．ホールの収容人員は 200 人（席）です。
7．ホールの利用は、入館していただく場合に限ります。講話･ビデオ以外には使用できません。
8．講話は､原則として当番の証言員が対応します。また､講師謝礼及び施設使用料等は頂いておりません。
9．年末年始（12 月 30・31 日、１月１日～３日）、旧暦７月 13 日～ 15 日（お盆）は、証言員が休みのため講話はできません。また、慰霊祭の前後、６月 21 日～ 24 日はビデオ上映会を行いますので、予約はできません。
10．ホール予約の方は、来館当日、窓口にその旨をお知らせ下さい。

ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第 43 号
2009 年（平成 21 年）５月 31 日発行
編集・発行　（財）沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館
資料館　〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1　☎ 098-997-2100
同窓会　〒 902-0067　沖縄県那覇市安里 388-1　☎ 098-884-1115
URL　http://www.himeyuri.or.jp/